

THE VOICE

Hospitality Design Forum 2009

第3回 「場所を消費する観光を超える、ツーリズム環境と場所環境デザイン」

東京藝術大学教授／環境建築家

清水 泰博



御母衣ダムサイドパーク (2001, 岐阜県)

## 関係のデザインから

清水先生の専門とはどういった領域になるのかお聞かせください。

一言で言いますと環境デザインです。

環境デザインというと実に広いのですが、大学の研究室では都市デザインとランドスケープを教えています。私自身はプロダクトまで含めたモノから都市までの領域を環境デザインと捉えて広くやっているつもりです。

芸大の授業でデザイン科以外にも受講されているデザイン概説の授業をしていて感ずるのですが、最近油絵などのフィンアート系の学生がデザインにとっても興味を持っている傾向があり、デザイン全般の広がりを感じます。

今はデザイン科内に空間・設計デザインの研究室が出来たのでインテリアと環境が分けられましたが、私の研究室であってもインテリアデザインやモノ造りをしたい学生がいれば指導をしています。面白い学生の例では、都市環境/ランドスケープデザインで入ってきた学生が、修了制作に器を提出したんです。でもそれは普通の器ではなくて、ランドスケープの器を作ってきました。

ランドスケープの器とは何ですか？

風景を器の中に作るんです。

コンタ模型という等高線による模型がありますが、それで器の中に谷や山、池などをイメージする風景を作ったんです。

たしかに茶器には景色という表現がありますが。

私自身は、器の中、料理の盛付けも環境デザインだと考えていて、講義で話もします。日本料理の盛付けは、まさに環境デザインで器の中に世界があります。床の間も、室内も全て環境デザインです。そういう事から言うと料理を盛る器の中にも、もちろんそういう世界があっただけいいのです。

先生の捉え方では、環境デザインにはスケールが無いと。

これは私のデザイン観だと思いますが、様々なジャンルのデザインをトータルに環境デザインという考え方でやっています。環境デザインは「関係のデザイン」だと思っているのですが、Aがここに在る事によって隣の場所にはBを置くべきという事が決まっていき、それはどのような色や形であるかまで自然と決まり、またそれによってC、D、Eも決まってきます。ですからプロダクトのデザインをする時は、そのモノというよりは、それが使われるであろう場所、環境から形が出てきます。

ということは、Bは1つの主体として存在するのではなく、全体としてBが存在すると。

そうですね、モノ1つだけで存在するという考え方はあまりしません。それらはどういった所で使われるかという事によってB、C、D、E達を考える。これは自分が今までデザインを

してきて、体感的に解ってきた事です。最初から意図していた訳ではなく、モノは別だと考えていましたが、どうしても空間に対して自分の思いがあるせいでしょうか。工業デザイナーでしたら切り離せるのかもしれませんが、私はなかなかそれが出来にくいのかも知れませんね。

#### ご出身の京都に関係があるのでしょうか？

関係があるとしたら父が金属彫刻家(清水九兵衛)で、街中にパブリックアートを造っていた影響でしょうか。常に周りとの環境の中で創作活動を行っていた事が多分に影響あるでしょう。私はジュエリーデザインなどもするのですが、その作品は全て金属を使っていて、父の仕事の手伝いの経験から金属に対する敷居は低いようです。後になってみれば、当時は嫌だったそんな手伝いも貴重な体験だったのかと思います。それに実家は長年陶器を作っており、器の中の世界という考え方は少なからず生まれに影響があったかもしれません。料理までは関心を持っていませんでしたが、モノから学ぶことが多かったと思います。

今では、環境デザインの講義は器の話から始めます。「器の中にも世界がある、その美というのは日本特有のものではないか」と。洋食と和食の器を全部一緒に並べ、何が違うかという、和食は器が全部ちがう、洋食は全部同じシリーズです。ウェッジウッドでは、高価な皿は20年30年後とずっと作り続けるものであり、5年で生産を止めてしまうのは、安ものです。それが西洋の文化であり、割れても買い足せば常に同じものがそろそろ。そろったものを継続できる事に価値を置いているのです。日本の場合はバラバラですね、良いお店などは意図的に違う皿で出したりします。例えば庭を引き合いにだすと、桂離宮が出来た同時代にベルサイユ宮殿も出来てい

る。ベルサイユは王様の別荘の庭、桂離宮は天皇にはなれなかったけれど王に准ずる人の庭、どちらも地位の高い人の庭ですが、これだけ美意識が違う。それは器との関係によく似ているのではないかと、さらに言うなれば現代都市にまで関係があるのではないかと。西欧は街をビシッと綺麗にしますね、日本は一生懸命西欧のまね事をして綺麗にしようとしませんがゴチャゴチャのままですね、しかしこれは伝統のものとの差異ではないかと。日本の昔の街はビシッと揃ってはいなかったようですね、素材が少なかったので何となく揃って見えているような感じかもしれない。しかし西欧は明らかに街並みまでそろえる意思があります。

とはいえ、今の日本はやらなさすぎ。乱雑さが限度を超えています。何か少し共通する要素があればいいのですが。

## 揃えすぎる必要はない、日本の町並みの美学

そう考えると、日本の景観や都市環境は、とにかくそろえる事とは違う回答だと。

それは私だけの考えではなく、共感したのは、西沢健さんという都市環境デザイナーでG K設計の社長だった方が亡くなる直前に「まだらの美学」という面白い文章を残されました。西沢さんはドイツに留学されていたこともあり、日本の街を西欧の様に綺麗にしようとずっと努力されていたわけですが、晩年になって「果たしてこれで良かったのだろうか？日本にはまだらの美学というものがある。ずっと私は街並みを綺麗にそろえようと努めてきたが、そのままでも良かったのではないだろうか・・・」と文章にされたのです。その言葉は西沢さんが言えばこそより説得力のある言葉で、しかも死の間際でしたから。しかし、僕も何となく思うのです、同じように揃えすぎる必要はないんだ、と。

槇文彦さんが「記憶の形象」という本の中で、日本の都市の表現として「微分的に自律的に揺れ動きながらコントロールしてきた」と、少し皮肉を込めた表現したのですが、その表現も言い当てているのかと思います。

成る程、微分的。隈研吾さんでしたか、「日本には建築家は居なかったのだ、環境デザイナーだったんだ」と言っていました、私もそんな気がしており、小堀遠州などの日本の建築家は確かに環境デザイナーだと思います。建築家はビシッと



セラミックワインボトル

作ってしまうという印象ですが、そうではなく、場の雰囲気をつくるというイメージなのではないかと。

周辺にある程度、身をもたれかけさせながら存在させるという感じですね。先生のおっしゃっていた回遊式庭園や、奥の話に通じるものでしょうか？

「奥」についての私の勝手な解釈ですが、その起源は京都の石清水八幡宮などの、山を利用した場の作り方ではないかと思っています。

神社などを自然の中に造ったときに山の中をずっと歩かせます、すると祠や山門など常に見え隠れしながら風景が続いていく。その感覚を庭園に応用したものではないのか、と私は考えています。最初は神社空間や自然の中を探索するようなイメージで、山の中の到達点に完璧なものを置き、そこへ至るルートを造り神秘性とありがたさを感じながら楽しんだ、その美学というのが庭園を造るときにも応用されていったのではないかと。ですから回遊式庭園もそうですし、建築を造るときも同じような美学を持つのです。小堀遠州の建築などは非常に奥行きがある、内部シークエンスが豊かで、その印象を強く感じます。ベルサイユなどでは全く感じませんね。



グエナエル・ニコラさんは、桂離宮は内部の完璧なプロポーションの美、ベルサイユは細部の豪華さだけと言われ、価値基準が全く違う事に気がつきました。

鳥瞰的に造っているものとアイレベルの違いがまずありますし、図面で造っているものと現場で造っているような感覚の差でしょうか。

そこへ立った目線で造るということですか？

ええ。ですから桂離宮には、おおよその図面はあったとは思いますが、現場で造りながら指示して造っていった気がしています。そうして造ったので見る側にも非常に訴えかけるものがあるのではないかと。現代でそんな仕事はなかなかあり得ないのですが、現場に立って指示し、造っていく事により、より良いものが生まれそうな気がします。

## ■ 旅を豊かにする町の環境デザイン

今回の会議のテーマである旅についてお聞きします

そういった文化土壌の日本とすると、旅の楽しみは？

やはり連続した雰囲気をたどれるということでしょうか。観光とは「光」を「観る」と書きますよね、その地へ行き他では観られない光を見てくるのが旅。それを連続して楽しむことが出来る代表が京都です。断片的ではなく、たどっていくことが現在でも出来る場所です。

光というのは影も含めてですね？宿泊一つをとってもホテルと旅館では陰影の表現、奥行きの表現が違います。

その旅館についてですが、昔の旅館と違い今は旅館がホテル化して、部屋は日本ですが通路は今の街路と同じで奥行きがない。残念なのですが、避難経路など安全の為に、分かり易くなった通路の先に部屋がある。現代社会と同じですね。私が幼少時代に宿泊した旅館などは、あちこちに中庭を造りながらとにかく曲がっていき、分かり難いくねくねとした所でした。それももとをたどれば山の中に神社を建てるという、空間の面白さをルーツにしているのではないかと思います。

では、町並みを生かした観光を積極的に考える街はどういう事をしたら良いでしょうか。

まず一つはあまり余計なものを作らないことですね、例えば歴史的な場所に新たなものを作るのであれば、いくら古く見せようとしても、結局偽物になってしまいます。「図」となる歴史的なものがあれば、周りは「地」に徹する方が良いのではないのでしょうか。

必要だと思うのは、色彩と素材感と、あまり巨大化しない様に適度に分節化することであって、必要以上に昔風の意匠はしないことが望ましいと思います。最近、街路灯なども



芸大アートプラザ

その地域の特徴を出そうとしています、でも多くの場合は地域で言われている言葉の上のデザインだったり、全く現代の景観と合っていないことがあります。

私は発言出来る機会に言ったり、また実際のデザインを行って、観念的なデザインを無くしていこうと努めていますが、私の言うような抽象的な事は解りにくいので、特徴的で解りやすいデザインが受け入れられやすいというのが現実です。また一度建てて慣れ親しんだものは、現状がどんなひどいものでも皆が残したいと思うので、本当に残すべきかという事は地元の人では冷静になれない部分もあるのです。

最近思うのは新東京タワーが出来つつありますね。いざ新東京タワーが出来たら、より東京タワーは残りそうですね。逆に言うと、スカイツリーが出来たが故に余計愛着をもつ。当時は批難が相当あったのに。

**東京タワーは、修学旅行向けの展望タワーから大人向けに変えて、来場者数が増えています。**

そうですか、ここだけ昔と全然変わっていない、ということを感じてみたかったです。中沢新一さんの本で、「昔見たまま、余りにそのまま残っていることに驚いた。」と書いてあったのでそういう目で見てみたかったのですが、残念ですね。

そう考えると時間スケールが長いですね。

都市のデザインというのは、ものすごくスケールが長い。建築よりも長く100年スパンで考えるものです。現在、都内はどこも一緒の様ですが、重要な場所は今もあります。それをそれぞれに適した方向へ修正して行くことが大切です。景観法というのが出来て、景観も保護が出来るようになりましたが、東京では今はまだやろうとしていないように思います。僅かかもしれないけれどいいものが残っているうちに手を打たなくては、無くなっていく一方です。無くなるとそれに似せたものを作ろうとするし(笑)

**観光庁が外国人観光客一千万人の目標値をだしましたが、どう**

**やったら海外の方が日本へ来てくれると思いますか？**

15年ほど前、具体的に私が京都市にプレゼンテーションした構想があります。京都は歩くのに適した場所なのに、あまりにもクルマが多く、有名観光地は慢性的な麻痺が起こっています。そこで大都市でのパーク&ライドを提案しました。中心部には観光客のクルマは入れない、そしてクルマを入れてなくても回れるような仕組みを公共交通で作る。自然の中にはクルマを入れない上高地を見て、クルマのない環境というのが実に気持ちがいいので是非参考にしたいと。

それには高速道路のインター近くに駐車場を設け、そこから電車と地下鉄を。京都には外周部を走る地下鉄を作れば、ほぼ観光地は回れるはず。後は自転車を地下鉄に乗れる様にしてカバーする。そうするとすごく良い街になると思いますし、住み手も観光客も喜ぶ街になるでしょう。

京都は明らかに観光客もクルマの流入も増え続けてますので、街のバランスが崩れて行く一方です。有名寺院だけが人を集め、人が集まりすぎると周囲の普通の家は無くなり、擬似的な昔風の土産物の屋が増加する、お寺だけでなく街全体の雰囲気の良いわけですから、できるだけ元に戻していく方向で街を作らなくてははいけなそうとします。

**全国的な問題ですね。クルマがその街の営みを変えてしまう、中心部が廃れて乗り物に乗らないと生活ができない現象も起こっています。クルマだけを無くすのではなく、それに変わるものを作って変えてゆく。今日は貴重なお話どうもありがとうございました。**

(撮影：岡田康継 聞き手：青柳新吾)

清水 泰博(きよみず やすひろ)

東京藝術大学教授、環境建築家

プロダクトからインテリア、建築、都市環境までのデザインを手がける。モノや建築と、それらが置かれる場・空間の関係を意識した「環境デザイン」的視点から様々なスケールのモノや空間のデザインを行っている。都市環境の設計においては地域性、場所性、連続性といったことに主眼を置いている。1957年京都市生まれ、早稲田大学理工学部建築学科卒業、東京藝術大学大学院美術研究科修了、黒川雅之建築設計事務所を経て SESTA DESIGN 代表、その後現職。主な作品は御母衣ダムサイドパーク・御母衣電力館(岐阜県)、月見橋(静岡県)、平和の交響(兵庫県)、ユニオン・ランドボールシリーズなど。1991年と95年に環境芸術大賞受賞ほか受賞多数。著書に「景観を歩く京都ガイド」「京都の空間意匠」がある。一級建築士。

